

実践事例紹介

学社融合の活動事例

- “レ・コードと音楽による町づくり”における音楽事業と学校との連携
- 学校を利用した高齢者大学の開催
- 学校図書室サポート事業

新冠町の小中学校

小学校9校 ・ 中学校1校

児童・生徒数



新冠小学校 179名

朝日小学校 37名

明和小学校 11名

若園小学校 17名

東川小学校 6名

美宇小学校 26名

太陽小学校 7名

節婦小学校 26名

大狩部小学校 2名

新冠中学校 195名

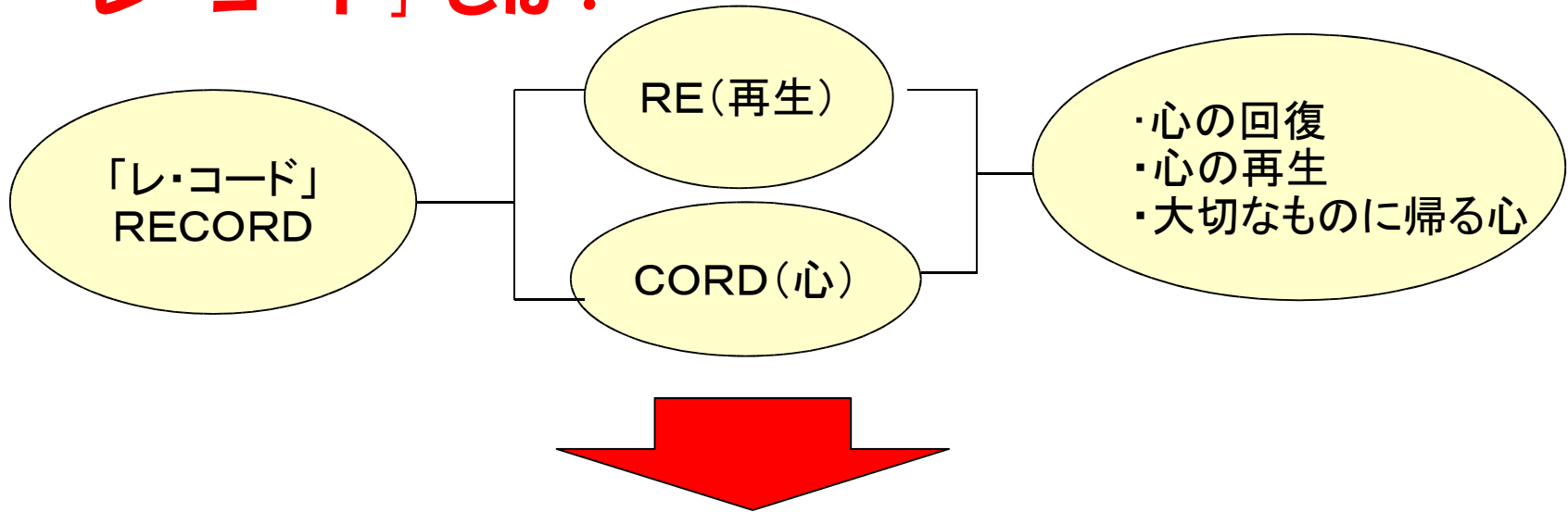
音楽事業の取組み



町づくりの発想を子どもたちへ

新冠町の取組み : 「レ・コードと音楽」による町づくり

「レ・コード」とは？



誰もが楽しめる音楽を手法として、「レ・コード」と音楽による社会教育事業を展開

音楽事業は、技術の向上を目指すだけでなく、音楽を通じて、心豊かな創造力や思いやりの心など、様々な心を養うことを目的としたものなのです。

学校を会場とした「レ・コード」な音楽事業の展開

はじめは、学校開放から

公共ホール音楽活性化事業（小規模コミュニティー音楽事業）の展開

- ・ 学校や地域の生活館を会場にミニコンサートを実施する。（H10年度）



学校の音楽授業へと発展

音楽の授業として、プロのアーティストが児童を指導する。

(※平成12年度～)



成果発表として

レ・コード館で開催されるコンサートに出演！

(※平成14年度)

学校授業での取り組みをレ・コード館で発表する





前日にアーティストとの練習



学校での練習

コンサートの様子



『音楽創造体験事業』

～自らが音楽を創造する体験授業の取り組み～

学校授業の中でオリジナルの曲づくりに挑戦

- 新冠町と事業交流を行っている「昭和音楽大学」より講師を派遣

昭和音楽大学 サウンドプロデュース科 講師 **益田 トツシュ** 氏

- 学校では『総合学習』もしくは『音楽』の授業として開催している。

音楽創造体験の概要

一つのテーマをもとに、子どもたちが想像する「言葉」や「音」などを引き出し、様々な楽器や道具などを用いてそれらを一つの音楽としてまとめ上げる。

★ 子どもたちに期待する効果 ★

- ①自己の心に宿る「音源」を発見
- ②創造(像)力の向上
- ③音楽の原点を知ることによる、音楽に対する親近感や興味・関心の向上

子どもたちの表現力を引き出す意味でテーマを具体的に示すことが必要

H15年度	ふるさと絵本「ハルニレから聞いたお話 にいかっぷ」
H16年度	ふるさと にいかっぷの風景
H17年度	心のふるさと〇〇小学校

講師からの確認事項

- ・子どものイメージを大切にする
- ・答えを用意して臨むものではない
- ・子どもの表現力を大切にする。



益田トッシュ先生

事業実施に向けて

本事業は町内の小学校9校で開催したいと考え、H15～17年の3カ年継続事業と計画し、開催希望する小学校での実施とした。

H15年度～3校

H16年度～2校

H17年度～3校

授業スケジュール及び所要時間

第1回目（7月） 2時間

第2回目（9月） 2時間

第3回目（10月） 2時間

第4回目（11月） 2時間

第5回目（12月） 3時間 ※発表1時間、練習・録音2時間

※上記以外に、事前の準備や練習などで数時間から10時間程度の授業時数を

要しているようである。

- 授業は講師が中心となり行い、担当教諭はサポートしていただく。
- 授業終了後に次回に向けての打合せを講師と担当教諭で行う。

音と遊ぼう リズム楽器を製作



砂利と空き缶でマラカス作製



スプーンと消しゴムを使ってカスタネットを作製

テーマを思い浮かべてグループで作詞に挑戦

テーマから連想する言葉やイメージなどを出し合い、また写真を見たり地域の方に昔の話を聞いて、詞を作り上げていく



写真を見てイメージUP



昔の話を聞く



イメージを出し合い作詞に挑戦

いろいろな楽器や音のでるものを使いリズムづくり

出来上がった言葉や詞に、いろいろな楽器や物を使って音をつけていきます



リズムづくりにチャレンジ

できあがった詞とリズムで発表の練習



全校生徒の前で発表



完成した曲を録音



完成したオリジナルの曲
とテーマ曲を録音し、**CD**
に記録して、子どもたち
にプレゼントします。



新冠町いきいき大学

小学校を主会場とした高齢者大学の開催

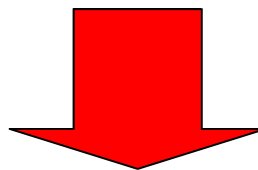


なぜ学校を会場にしたのか

生活館での学習会が集いの場となっていた

参加者が生き生きと学習していない

学習意欲・緊張感の欠如



学習意欲を高める→環境を変える→集合しやすい場所
→地域に目を向ける→学習にふさわしい場所

地 域 の 小 学 校

私たちの考えた高齢者大学の理想像

児童と同じプログラム、学校生活

年中行事

入学式、遠足、運動会、
学習発表会、卒業式など

学習日

登校、朝の会、学習、
休み時間、給食、清掃、
帰りの会、下校

学級の一つとして共同生活を送る

学校を会場とするための取り組み

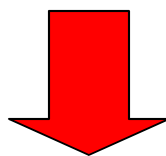
<H13年度>

モデル校の選定

東栄大学
東川小学校

明治青年大学
太陽小学校

福寿大学
明和小学校



学校開放事業として開催

試行開催して～感想、意見など

継続することで子ども達にとって良い影響があるのでは

学校側

教職員の閉鎖性を打破するきっかけになるのでは

活動の場の共有を始めとして、地域の方の学校教育への積極的な参加を期待したい

高齢者

施設面、交通面、出席面での都合が良い

子どもや先生がいる事で緊張感が生まれ、より熱心に取り組む姿勢が見られた

平成14年度以降の取り組み

会場となる学校数の拡大と事業展開を図る

東栄大学
東川小学校

福寿大学
明和小学校
若園小学校

明治青年大学
太陽小学校

朝日高齢者大学
朝日小学校

節婦寿大学
節婦小学校

大昭大学
大狩部小学校

朝日小学校を除く小学校では、高齢者が学習発表会へ出演しています

休み時間、様子を見にきた子どもに作品を見せてます



学校の学習発表会に併せて作品展を開催



現状と課題

- 学校開放事業の一環で開催している。
- 総合学習の取り組みなどで、高齢者が活用され子どもと高齢者の関わりが増えた。

児童との交流の機会の増加

→当初は高齢者の意識も高まったが、児童や教職員との接点がなければ、これまでと変わらない。高齢者だけでなく、学校側にもプラスとなるようなアプローチが必要

図書事業における取り組み

- 学校図書室の運営サポート
- 手づくり絵本を通じた世代間交流

学校図書室の運営サポートの取り組み

この取り組みは、子ども達にとって最も身近な図書施設である学校図書室の機能充実を図るものです。たくさんの新しい本と、魅力溢れる地域人材との触れ合いの中で、子ども達が本を身近なものに感じ、ひいては全町的な読書推進に繋がっていくことを目指すものです。

【取組みの概要】

平成16年度、新冠小学校を対象に試行開始。学校からの好反応を得て、17年度は朝日小学校を加え、2校を対象に実施している。

—— 主な活動

- ①年間を通して2, 500冊の図書を供給
- ②地域ボランティアサークルを組織し、児童図書委員の活動を補助
→17年度は、補助のほか、読み聞かせをはじめとする「きっかけづくり」に重点を置いている。
- ③先生を含む連絡協議会を設置。運営のあり方についての協議の場としている。

【実施後の効果】

- 人が入ることにより、図書室の空気が変わり、休み時間には子どもが図書室にやってくるようになった。
- 導入に併せて既存資料の整理を行ったことにより、棚の配列がわかりやすく整理された。

手づくり絵本を通じた世代間交流

実行委員を組織してのふるさと絵本の製作

平成15年度に、郷土文化研究会、アトリエの会、読み聞かせの会「びっくり箱」等が中心となり、実行委員会を組織。勉強会を重ね、皆で郷土の歴史や自然を見つめ直しながら、絵本の原案を協議した。

絵本のテーマ

製作中に当町を見舞った水害を踏まえ、自然と人間の有機的な関わりを子ども達にわかりやすく伝える。木を植える老人の姿を通じて、ふるさとを自分達の手で育て、守るという姿勢を描く。



製作後の活用

- ・ 市内の小学生のいる家庭に一冊の配布
→ 絵本をきっかけに、親子間で新冠の昔や自然について語られるきっかけ作り
- ・ 小学校での読み聞かせの実施
→ 16年度には、完成した絵本を各小学校で、ボランティアによる読み聞かせが行われた。